



Title	日本の都市環境における外国人の経路探索行動に関する研究
Author(s)	秦, 丹尼
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44932
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	秦 丹 尼
博士の専攻分野の名称	博 士 (工 学)
学 位 記 番 号	第 1 8 1 2 5 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 15 年 9 月 30 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 工学研究科建築工学専攻
学 位 論 文 名	日本の都市環境における外国人の経路探索行動に関する研究
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 舟橋 國男 (副査) 教 授 柏原 士郎 教 授 吉田 勝行 助教授 鈴木 毅 助教授 木多 道宏

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、多様な人々が行動しやすい環境への改善を目指して、増大しつつある外国人の経路探索行動における迷いの状況、情報要求等にみられる特有の問題及び関連要因に注目し、日本の都市環境における経路探索行動の特徴を把握することにより、分かりやすい環境整備の方向性を検討している。

第 1 章では、経路探索行動にかかわる社会的背景ならびに既往研究の検討に基づき、外国人の経路探索行動に関する研究の位置付けを行い、研究の目的を述べている。

第 2 章では、留学生の日常生活実態に関する文献調査、留学生 16 人のインタビュー調査ならびに外国人の経路探索行動の事例調査を行い、外国人の日本への環境移行後における日常生活上の困難、経路探索行動等に関する基礎的な問題の所在及びその影響要因を明らかにしている。

第 3 章では、初めて来日した対象者が 1 年半の間に経験した経路探索事例 16 件について自己記述とインタビュー調査を加え、行為主体の属性、個人条件、環境知識を詳細に検討した上で、滞在期間と探索行動のし易さや迷い程度との関係を考察している。更に、出身国の探索行動事例との比較から、日本の都市環境における探索行動、行動計画、案内誘導情報や空間情報利用にみられる特徴と差異及びそれらに影響を与える要因を考察している。

第 4 章では、大阪梅田周辺における訪日・在日外国人 58 件及び日本人 53 件に対する経路探索行動の追跡調査及びインタビュー調査を行い、探索行動の実態を詳細に記録・分析し、歩行行動指標の定量的分析を加えている。その結果、外国人の経路探索は迷いの程度が大きく、既存の案内誘導情報や空間情報の利用に制約があり、目的地到達には行動的・心理的に過度の負荷のあることが認められている。これらは、言語能力・滞在期間・環境知識や経験の不足、固有の社会文化的スキーマとの不一致、さらに駅舎空間構造の差異等が原因となっていることが明らかにされている。又、経路探索行動において多くの人々が依存する既存案内誘導情報及び案内所の実態と問題点を指摘している。

第 5 章では、各章の結論をまとめ、日本の都市環境における経路探索行動の様相及びその関連要因を要約すると共に、求められる環境デザインの今後の課題と方向性を示している。

論文審査の結果の要旨

国際化が喧伝される今日、「外国」への移動は盛んになりつつあり、今後も着実に進展するものと予測されている。他方、現代都市は、大規模化・複合化された大型施設等の建設等により、ますます複雑で分かりにくい環境になりつつあり、利用目的の達成は必ずしも容易ではない。

高齢者・障害者・外国人などを含む、多様でかつ移動の激しい都市生活者・来訪者の自由な交流と活動を容易ならしめる都市構造は、開かれた国際化を目ざすべき社会公共にとって、最も重要な普遍的価値の一つであり、物理的なバリアフリー化にとどまらず、空間的・情動的バリアーを取り除き、広義のアクセシビリティを向上させることが必要である。

本論文は、日本の大都市における外国人の環境移行時における生活環境の形成過程、環境認識と経路探索の変容過程、および大規模駅ターミナルにおける目的地探索過程の詳細な調査分析を行い、今後の都市環境整備の方向性を検討したものである。

得られた主な結果は以下の通りである。

(1)異文化環境への移行初期における、日常生活や経路探索上の困難とそれらの要因について、既往資料並びにインタビューにより検討した結果、異文化環境に対処するための認識基盤が無いために、目的（地）発見・探索のための行動計画の設定や探索方略の選択および問題解決の方法等に困難があることを明らかにしている。

(2)特に、社会的な機能分化や施設固有の文化的意味、都市環境の空間的構造、住居表示方式などに見られる差異が、出身国で形成された固有のスキーマとの不一致をもたらし、経路探索における迷いの主要因となっていることを示している。

(3)特定対象者の経路探索事例に関する1年半に亘る継続的調査により、人間と異文化環境とのトランザクションに関する一般論に照らして、初期の「接触期」と「不統合期」を経て、中期の「再統合期」と「自律期」を越え、さらに「独立期」に至る過程が窺われることを示唆している。

(4)外国人ならびに日本人の経路探索行動に対する追跡・インタビュー調査によって、外国人の経路探索は迷いの程度が重く、情報利用行為及び探索時間ともに負荷が大きく、行動的・心理的影響の大きいことを明らかにしている。

(5)言語的障壁や地理的環境知識の欠如等による情報利用の困難・制約が見られ、また、駅舎空間構造の差異等が原因となって、自力では解決できない事例があることを指摘している。

(6)調査対象地区とした大規模駅ターミナルにおいて、迷いが有意に多く発生する幾つかの特定の交差点空間が抽出され、それらにおいては、当該空間の秩序性が少なく、案内誘導情報の配置・内容・視認性等、既存情報システムの有効性が低いことを明らかにしている。

(7)これらの結果に基づき、都市環境の分かりにくさに関する外国人に特有の問題点を示し、今後の解決の方向性を検討している。

以上のように、本論文は、かねてより分かりにくいとされている日本の都市環境における経路探索に関する外国人特有の問題点を指摘し、今後の環境整備の方向性を検討・考察して有益な示唆を得ており、建築工学、特に都市・建築計画学の発展に寄与するところ大である。よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。